



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

ニューヨーク日本人学校 (Greenwich Japanese School: GJS) での特別支援教育：  
個別の指導計画に基づく実践を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福永, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/00174046">http://hdl.handle.net/2309/00174046</a>

# ニューヨーク日本人学校 (Greenwich Japanese School: GJS) での特別支援教育

—— 個別の指導計画に基づく実践を通して ——

前ニューヨーク日本人学校 教諭

熊本大学教育学部附属特別支援学校 教諭 福永 哲也

キーワード：特別支援教育、個別の支援計画 (IEP)、交流学級、お金の学習、特別支援学級運営

## 1. はじめに

ニューヨーク日本人学校での3年間は、特別支援教育に関わる私にとって、知見を広め専門性を高める貴重な経験となった。スクールサイコロジストやスピーチセラピストからの助言、さらにニューヨーク州の公立学校（以下、現地校と略す）の訪問から、アメリカの特別支援教育の様々な推進状況を体感することができた。

アメリカの特別支援教育には、日本人学校や日本国内の学校にはないシステムが実践されており、その代表としてあげられるのが個別の支援計画 (Individualized Education Programs: 以下 IEP と略す) である。日本でも個別の教育支援計画や個別の指導計画が作成されているが、アメリカのように法的根拠をもつものではなく、作成の手続きや内容の特別な規程もない。アメリカでは IEP に基づき、一人ひとりに応じた効果のある教育が責任をもって実施されていた。また、教室でのユニバーサルデザイン、視覚的に分かりやすい教材、情報機器の配備など、子供達の学習を支援するための環境がすべての教室で整備されていた。法的な条件整備のない日本人学校で、アメリカのシステムをそのまま取り入れることは難しいが、一人ひとりの子どもたちの教育的ニーズに適切に応じるために、IEP の取り組みから得た知見を基にしたニューヨーク日本人学校での実践について述べる。



ニューヨーク日本人学校の校舎の一部

## 2. ニューヨーク州の特別支援教育から学んだこと

ニューヨーク州のスクールサイコロジストやスピーチセラピストの紹介で、ニューヨーク州 Harrison にある 5 歳から 10 歳までの児童約 500 名が通う Parsons Memorial School という現地校を訪問した。訪問では、IEP に基づく教育を知る機会となった。

Harrison という地区は、日本人の駐在の家族が多く住んでいるため、同校には日本人の児童が複数在籍していた。保護者の急な転勤で通うことになった児童の場合、英語でのコミュニケーションが難しいという理由から、IEP を取得するための専門家による査定を行うケースもある。また、特別支援教育のサポートも併せて必要であるとされた場合は、英語のクラスを無料で行うなどの手厚いサポートが決定される。このように、IEP は支援が必要な児童生徒に対して、明確な目標設定とサポート体制が決定され、効果のある教育を行うことが義務付けられている。



Parsons Memorial School の校舎

また、IEP に基づく具体的な授業についてだが、見学した 5 年生クラスでは、ティーム指導 (Collaborative Team Teaching: CTT) が行われており、算数の授業で、苦手な子には簡単な問題を事前に準備し、授業への意識付けを行っていた。メインティーチャーの他に、もう一人教室にサポートティーチャーがおり、授業が分からない時に個別支援を行ったり、苦手な子に個別学習の場を設定したりして、子どもの授業理解をサポートしていた。課題

によってはレベルの異なる児童間の学習も適切に確保されていた。

また、セルフコンテントクラス（特別支援学級のような環境のクラス）では、視覚的な支援が随所に見られた。様々な障がいのある児童が通っているが、この学校ではコミュニケーションに特化したクラスが設置され、話の聞き方や友達や教師との関わり方などを重点に置いた、トークンシステムが行われていた。このクラスにおいても、IEPにより一人ひとりの子供達のゴールが明確に示されていた。そのゴールは、教室の目につく箇所に掲示されており、子供達自身の意識の高揚や教師の共通理解の点で、効果的なものとなっていた。このようにアメリカの特別支援教育は、一人ひとりの児童生徒への支援がより柔軟なシステムとなっており、ニューヨーク日本人学校でも教育充実のため取り入れることができることはないか考察してきた。

### 3. ニューヨーク日本人学校での実践を通して

#### (1) ニューヨーク日本人学校の特別支援学級において

ニューヨーク日本人学校は私立学校なので、アメリカの教育システムではなく、日本の学習指導要領に基づいた教育を行っている。同校の特別支援学級（以下アップル学級）においても同様である。アップル学級は、基本的には交流学級での授業参加により、集団生活や同学年の児童生徒との関わり方を学びつつ、個別のニーズに応じる指導形態をとってきた経緯があった。同学級の児童生徒5人に対して、支援員の先生が日替わりで4名、特別支援コーディネータと担任2人という日本よりも手厚い支援体制を組ませていただいたのは、IEPに示された合理的配慮、及び教育充実を図るために大変ありがたい体制であった。

課題としては、交流学級の時間割に準拠するために、アップル学級の時間割はそれぞれの児童生徒によって異なることが多いという点だった。毎時間それぞれの児童生徒が違う授業を受けることで、同行する支援者が様々な授業に分かれるので、児童生徒に対しての情報交換が難しく、支援員の勤務時間の制限により話し合いの時間の確保が難しかった。そこで、全支援者はタブレット端末を授業時に持参し、次の授業に必要なことや宿題などのエピソード記録を毎時間蓄積し共有できるようにすることで、円滑な授業の引継ぎや児童生徒の実態を確認できるようになった。初等部1、2年生の児童への支援では、学力の面で難しい場面が発生すると、交流学級の担任と連携を図り、次の授業の打ち合わせを行った。授業の流れや押さえておきたいポイント、それに向けての具体的な支援方法、円滑に授業を受けることができるようなグルーピングなど、必要に応じて話すようにした。また、アップル学級の児童生徒だけではなく、課題につまずいた児童に対してサポートティーチャーとして関わり、課題解決してきた。保護者との連携では、連絡帳や電話での確認は当然のこと、学校で十分時間が取れなかった学習内容について、インターネットを活用して家庭でも練習できるようにした。その結果、足し算の理解や漢字の学習、国語の読み取り、合唱など、これまでの個別の学習だけでは定着が難しかったことが、少しずつだが、着実に力が付いてきた。

#### (2) 特別支援学級の個別の指導計画の評価見直し

アップル学級では、従来から全児童生徒に個別の指導計画を作成して、支援に生かしてきた。今回の赴任により、熊大式授業作りシステムの1つである「支援者ミーティング」の手法PATH（Planning Alternative Tomorrow with Hope）を活用して、児童生徒の将来像から3年後までの目標、そして今年度の目標を保護者とじっくり話し合い、合意形成を図った。時間の都合上、専門家を交えたミーティングは難しかったので、必要に応じて専門家との打ち合わせを別の時間に行いながら、一人ひとりの支援の充実に務めてきた。

また、ニューヨーク日本人学校で活用している、日本の個別の指導計画の書式の見直しを行った。IEPの客観的な数値化を用いた評価を参考にして、何%達成でこの課題をクリアしたことにするかを盛り込み、文章での表現に加え、目標に対してより客観的に評価することにした。評価にあたっては、前述のタブレット端末を用いて支援者で積み重ねたエピソード記録を活かすことにより、エビデンスに基づく評価を行うことが可能となった。

### (3) 授業改善の取組 (Lesson Study Open House から)

ニューヨーク日本人学校では、毎年 11 月に Lesson Study Open House を開催し、アップル学級も 1 つの分科会として、現地の教師を招いて研究授業、授業研究会を行い、現地の教師から意見をいただいている。赴任 2 年目に、以下のような数学（お金の学習）の授業を行った。

①単元名 お金の使い方 「買えた！お見事！楽しい買い物タイム」

②単元の目標 ～生活に直結した体験から、既習の計算の知識を使い、買い物学習に取り組むことができる。～

③教材について

本学級では個別の指導計画の作成において、ブレインストーミング方式を採用し、保護者、特別支援学級担任、通常学級担任、学習支援コーディネータでそれぞれの児童生徒の特徴や、課題点を出し合った。個々の実態に即した課題の中で、「お金の使い方」が重要な課題として挙げられた。生活をする上で、仕事をして収入を得て必要な物を購入することは重要なスキルであり、自立的な生活のために不可欠である。しかし、アメリカでは自分で買い物に出かけるという経験をするのが難しい。将来日本へ帰国する可能性がある生徒なので、日本のお金の使い方を通して、目的に応じた買い物ができること、買い物の手順を知ること、お金には種類があること、お金を大切にすることなどを指導し、日本に帰国した際、自立した生活に必要な知識や技能を身につけることができるよう本単元を設定した。以下は、生徒の様子と個別の指導計画で設定した目標である。

	〈生徒A：ダウン症〉	〈生徒B：ダウン症〉
生徒の様子	元気で快活な男子である。日常生活において自分の考えを主張し、妥協しないことがあるが、その回数は少しずつ減ってきている。	責任感が強く、任されたことは一生懸命に取り組む男子である。周囲の状況を見て行動できるようになってきた。自分で考えて行動することも増えてきている。
お金についての生徒の様子	1 学期から金種の学習を始めており、今ではお金シートを活用して提示された金額分を出すことができる。お金を支払うと物が買えるという流れは理解しているが、金額分以上を支払うこと、お釣りがあつたことを理解するのが難しい。	貨幣を数える時に読み間違ふことがあるが、お金シートなどの教材を使うと、正しく読み取れる。買い物の流れは理解しているが、お釣りを確認し忘れたり、支払う時に金種を間違えたりすることがある。
個別の指導計画の目標	チラシを見て、どのくらいお金が必要かを理解してお金を出すことができる。	チラシを見て、金額を計算し、ちょうどの金額を出すことができる。

#### ④指導にあたって

生徒は作業学習で、労働に向けた取り組みとして、週 1 回の清掃活動を行ってきた。その活動では、生徒が作業に集中して取り組むことができたなら、その対価としてラミネートされた紙のお金を得るという方法により、働くことへの意識づけと、働くことへの評価として収入が得られるというイメージができるようにした。本単元では、作業学習で得た収入で、買い物をするという実生活に即した流れを意識づけてきた。また、一人ひとりの特性をいかした教材として、情報機器を活用して、授業への意欲を引き出せるよう配慮した。買う物は生徒の主体性を引き出すために、実際のチラシを用いて、たくさんの商品を選べるようにした。振り返りの場面では、頑張りカードを用いて、振り返りの観点を示し、生徒自身でできたことの理解と次に頑張る内容を確認できるようにした。

### ⑤単元計画

	小単元	学習活動	おもな評価基準および留意点
1	値段分のお金を出そう	・提示された物の値段をチラシから確認し、その分のお金を支払う。	・提示された物をチラシから見つけて、ちょうどの金額を支払うことができる。
2	十分な金額を出そう	・提示された物の値段をチラシから確認し、十分な金額を支払う。	・値段に応じて、十分な金額を支払うことができる。
3	お釣りを確認しよう	・多く支払うとお釣りが出ることを知る。お釣りの金額を確認する。	・どんなときにお釣りが発生するかを理解することができる。 ・得意な方法でお釣りの額を確認することができる。
4	好きな物を買おう	・あらかじめ所持金を確認して、チラシの中から好きな物を選び、購入する。	・自分で稼いだお金で欲しいものを決めて購入し、お釣りの確認をすることができる。
5	残金はいくらになるかを考えよう	・買い物学習を通して学んだことを、振り返る。最後に残金はいくらになったかを考える。	・これまで学習したことを理解し、買い物の一連の流れを行うことができる。

### ⑥分科会での現地の教師から

この年の分科会では、9名の参加者から以下のような質問があった。

- ・アップル学級の児童生徒は、通常学級と一緒に学習することがあるか。
- ・今回の公開授業で学んでいる課題に対して、どのくらい時間をかけることができるか。
- ・日本では特別支援が必要な子供かどうかを決める判断の基準はどのようなものか。
- ・児童生徒と教師との関係をうまく築くために、工夫していることはあるか。

様々な意見や質問が飛び交う中、アメリカの教師から上記のような質問について悩んでいるという意見が出てきたことから、アメリカでも特別支援教育は難しいと感じていることが分かった。参加者からの感想は、「ユーモアのある授業であり、特に生徒の活動や考える学習中に根気強く待つ事で、教師の考えさせる姿勢がよく表れていたと感じる。活動的な課題もうまく対応して処理していた。教師が良く生徒を理解していること、生徒のニーズをうまく理解していることが授業を通じて良く伝わってきた、ここで学習している生徒は幸せだと感じた」と、肯定的な意見が多かった。IEPから学び、授業改善を図ってきた取り組みに対して、アメリカの教師から評価を得たことは、大きな成果となった。

## 4. おわりに

3年間で、アメリカの特別支援教育から多くのことを学んだ。アメリカの特別支援教育では、障がいのある子どもの通常学級における学びの充実を目標としている。この視点をアップル学級でも大切にしていって取り組んできたが、児童生徒に対して将来の生活に必要な力を付けることができているのか、自問自答を繰り返してきた。しかしながら、通常学級に入って授業を受ける児童生徒の「次は国語だ」「先生、8Aに行ってきます」など、生き生きとした表情を見ると、通常学級での授業を楽しんでいることが伺える。私たちが大切にしなければならないことは、障がいのある児童生徒が通常学級でも充実した学びができるよう適切なサポートをすることだと考える。私は、アメリカの教育システムの良さも分かるが、日本の特別支援教育の取り組みはアメリカに負けないと自負している。日本の教育の良さ、日本人としての誇りについても改めて認識するとともに、児童生徒、保護者、同僚の先生方の暖かさを感じ、充実した3年間だった。この3年間で学んだことを今後も実践しながら、一人でも多くの児童生徒が楽しいと思える学校づくり、「分かった」と感じることでできる授業づくりを目指し、日々奮闘していきたい。